

MMM
2022
みなとメディアミュージアム

MMM
2022

みなとメディアミュージアム

記録集



センス・オブ・ワンダーを探して ー 海と生命のかかわり

本展開催にあたり

世界的流行である新型コロナウイルス感染症による影響は、地域の芸術祭の一つであるMMMにも影響が及び、さらには存続さえも危ぶまれている。生命芸術研究部会に助け船の協力を要請されたのは今年の3月であった。

年内に出来ればとの事であったが、その5ヶ月後の8月の夏、MMM2022開催へ向けて我々は早々に動き出した。

生命芸術研究部会が企画したイベント展示のテーマは「海と生命との関わり」、思えば生命芸術研究部会が発足する由縁も「海と生命との関わり」にあった。

環境保護運動の始まりでもあり、アースディや国連人間環境会議のきっかけともなった環境問題の古典「沈黙の春」で知られるレイチェル・カーソンは、その著書を発表する遥か初期の頃から、持続可能な生命の在り方を「海と生命との関わり」をテーマとする『海辺』から見出している。

時あたかも新型コロナウイルス感染症により、環境問題が声高に語られている。持続可能な生命連鎖を養う、つまりセンス・オブ・ワンダーの再発見こそ、人間を含む生命にとって、そしてMMMにとっても、持続可能な営みへのメッセージが有ると感じている。

新型コロナウイルス感染症による環境と人間の不調から環境問題への関心を、MMM2022 イベント展示のテーマ「海と生命との関わり」からセンス・オブ・ワンダーを養うきっかけを、訪れる人々にも感じて頂けたら幸いです。

index

03	本展開催にあたり
06	ごあいさつ
08	Exhibition of works
10	MMM2022 作品紹介
10	ホリグチシンゴ「HORIZON CONVERTER」
12	奥田 祥吾「Sence of wonder in 那珂湊」
13	吉川 信雄「数理アラベクス ARABESQUE」
14	長谷川 千賀子「塩の循環—沈黙した海より」
16	ホリグチシンゴ「DRAWINGS (HORIZON CONVERTER)」
18	多田 満「3つのエコロジー— 海と生命のかかわり Three ecology— The relationship between the sea and life」
20	43「BANKOKKI 2016-2022」
22	宝塚大学 東京メディア芸術学部渡邊哲意 研究室「湊線ヘッドマーク」
24	みなとのおへそ WS
26	MMM アーカイブ展
32	MMM 共同代表より
33	ABOUT MMM
34	協賛企業

この度は、海という環境と生命に対する理解のもとに創作発表の機会を与えていただきありがとうございました。生命芸術研究部会では、観賞者や市民との対話と協働により環境と生命に対する意識を高め、生命と自然と社会のかかわりの理解に基づいた理論研究と創作活動を行い、観賞者や市民の側との相互評価により生命を基盤とする社会の構築を目指しています。

鉄道をはじめ科学技術に支えられた現実社会をグローバル glocal（地球規模の global と地域的な local を合わせた造語で、地域性を考慮しながら地球規模の視点で考え、行動することを表した言葉）な視点で考えるとき、「健康は空気と水から」といわれますが、科学は「現代文明の空気」なら、芸術は「現代文明の水」になることが期待されます。そして、レイチェル・カーソンが語った「センス・オブ・ワンダー」（不思議さを感じる力）と「限らない好奇心」が科学と芸術を、ここまで素晴らしいものへと発展させてきた力であったと考えられます。今後の MMM においても沿線の住民や鑑賞者との対話と協働により、那珂湊という地域の芸術振興につながる展覧会の開催になることを切に願っています。

皆さん。海辺に訪れると、まずいちばんにすることはなんでしょう。僕は、匂いや音を感じることに、遥か遠くへと続く空と海の境界線をただ眺めることです。見る境界線はいつも水平で同じなのですが、見える空や海は毎回違います。空に流れる雲のかたちや速度、濃淡においてもそこに同じパターンは 2 度と現れません。海の波打つ情表もまた同じです。このオートマティスムな自然の織り成す現象に、しばし心象風景が重なることがあります。それは大自然のドラマに浸りながら、生命の神秘さに目を見はる瞬間です。時折りその場面々々から、生命の尊さを感じることもさえます。

この度、MMM2022 専属ディレクターとして掲げた展覧会テーマは、「センス・オブ・ワンダーを探して―海と生命のかかわり―」でした。“新型コロナウイルス感染症による環境と人間の不調から環境問題への関心と、センス・オブ・ワンダーを養うきっかけを、訪れる人々にも感じて頂けたら、”という思いでこのテーマとなりました。MMM2022 を振り返ってみると、各出展作家、MMM スタッフ、協賛企業をはじめ

とする MMM にかかわる多くの方々が、今回の展覧会テーマも相まって、コロナ禍という躊躇した環境の中で、如何にして MMM に参加しようか、または持続可能な MMM にすべきかを、篤と見つめ直されていた気がいたします。

MMM2022 を終えた 2022 年 12 月現在、新型コロナウイルス感染症による世界的流行は未だに続いております。「センス・オブ・ワンダー」には、MMM2022 の開催地である那珂湊における未来の地域社会、そして人間をふくめた生命環境の循環する営みにおいても、持続可能性へと導くポテンシャルを秘めているのだと、展覧会を終えてからより感じております。MMM2022 でたびたび訪れた水戸八景「水門帰帆」の碑の高台の眺めから感じられる「センス・オブ・ワンダー」はまさに那珂湊の躍る生命です。グリーンインフラとしての港町の魅力に溢れています。皆さん是非、訪れてみて下さい。最後に、MMM2022 にかかわって下さった多くの方々に、あらためて心よりお礼申し上げます。引き続き MMM へのご支援ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたします。

01 百華蔵



多田満
吉川信雄
長谷川千賀子
ホリグチシンゴ
奥田祥吾

02 みなとのおへそ



奥田祥吾
今中厚志/中西礼愛
小佐原孝幸
(8/14~28)

03

那珂湊駅



43

04 湊線運行車両



宝塚大学
東京メディア
芸術学部
渡邊哲意研究室

05 水門帰帆



ホリグチシンゴ





ホリグチシンゴ

HORIZON CONVERTER

制作年 2022年 | 7月30日ー8月5日 [前半]、8月9日ー8月13日 [後半]

素材 金網フェンス、ロープ、屋外用塗料

サイズ 高さ2m 幅3m

●Profile | ホリグチシンゴ

1993年生まれ京都市出身

2018年多摩美術大学修士課程日本画研究領域修了
東京を拠点に平面作品を中心に発表。

近年の個展 2020年

FUZZY CRAWL @ アートスペース羅針盤 (京橋)

2021年

The Field and Daylight 3.0 @ 数寄和 (西荻窪)

The Field and Daylight 3.2 @ tagboat (有楽町)

<コメント>

那珂湊駅の近くのアパート（通称みなとハウス）から電動自転車で朝夕、水門帰帆まで通い公開制作を行いました。夏ど真ん中の炎天下での作業は過酷を極め、時折海からふいてくる潮風が微かな癒しでした。間違いなく人生で一番日焼けした8月になると思います。公開制作の終盤では近隣住民の方も気兼ねなく声をかけて下さり、水門帰帆から那珂湊を見渡しながら街や美術の話を出来たのは、今夏の忘れられない思い出になりました。

今年のMMMから3ヶ月が経ちましたが、制作した作品は自分にとってエポックメイキングなものになりつつあります。ロケーションの発見から自治体との交渉、実際に制作に移れるまでの驚異的なスピード感は、運営形態がボトムアップ式のMMMだからこそ出来たことだと思います。現場での発見やアイデアを臨機応変に実行出来るのは芸術祭として稀有なポテンシャルなのではないでしょうか。今後もMMMが地域や人々との繋がりの中で良い形で続いていきますように。今回の制作に関わって頂いた方々に改めて感謝をお伝えします。





吉川 信雄

数理アラベクス | ARABESQUE

制作年 2022年 場面投射・音制作

原画を起点として、その映像をランダムに組み合わせると、次第に視野が広がっていき、自由度もそれに伴って可能になり、幸福度が増して行く。

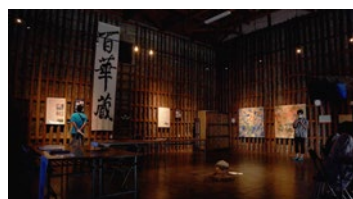
作画上、自由度と幸福感は私にとっては重要な要素でもある。実験的表現が時にはランダムノイズのように手に負えないほど画面をのさばることもあるが、それに懲りずに進んでいく。

これらの抽象的な画面投射には、ある種の幸福感を伴った本質が見えてくる。新しい自分を想像すること。希望を可能にすること。

実装と利便性ととはかけ離れた地点で、幸福のシグナルを掲げる。

●Profile | 吉川 信雄

- 1948 群馬県高崎市生まれ
- 1975 セント・マーチンズ美術学校（ロンドン）、プリントワークショップ等で創作活動を行う
- 1987 KAMAE EXHIBITION（ロンドン）を企画・プロデュース
- 1993 竹の都市展（すみだリバーサイドホール・ギャラリー）企画
- 2000 Daejeon Media Art 2000（韓国・大田市立美術館）参加、日本側審査委員
- 2010 CONTEMPORARY ART FROM JAPAN（ストックホルム）
- 2013 UMETNOST VZHODA（スロベニア）アーティスト・イン・レジデンス
- 2019 小田原城アート NOW（黒田長成侯爵 清閑亭）
- 2021 8+9 2021 ナガサキの地でアートを考えるⅢ（長崎県美術館）
- 2022 中外艺术家“庆冬奥，迎新春”在线作品展（中国・北京 オンライン）



奥田 祥吾

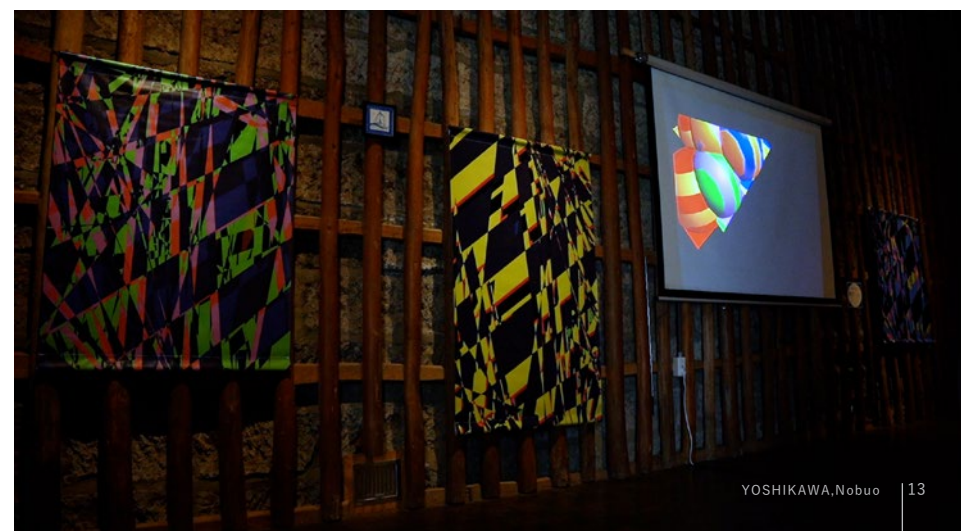
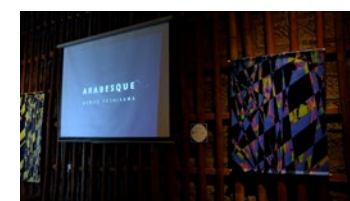
Sence of wonder in 那珂湊

制作年 2022年 素材 パネル、ボード、投網、スクリーン 他 サイズ 118.37㎡（CH=5.78-8.43m）

環境芸術学会 生命芸術研究部会メンバー等による、百華蔵内における展示の会場構成である。生命芸術研究部会の活動紹介パネルを見ながら会場を散策し、作品を探して鑑賞するスタイルは、MMM2022 展覧会テーマ「センス・オブ・ワンダー」を探して一海と生命のかかわり、そのままの意を、空間コンセプトとしている。会期直前の設営現場において、居合わせていた吉川信雄氏との即興により、かつて那珂湊の海で実際に使われていた投網による協働作品も実現している。

●Profile | 奥田 祥吾

- 1983 東京都 出身
- 2006 日本大学 理工学部 海洋建築工学科 卒業
- 2008 武蔵野美術大学大学院 造形研究科 デザイン専攻建築 コース 修了
- 2011 菊竹清訓建築設計事務所 出向
- 2012 一級建築士事務所 S.O.A.O 開設
- 2019 MMM2019 出展 ひたちなか海浜鉄道賞 受賞
- 2019 環境芸術学会 生命芸術研究部会 発足
- 2022 MMM2022 専属ディレクター
- 一級建築士 環境芸術学会 会員/事務局
- 建築家フォーラム 会員 日本建築学会 会員





Violin Improvisation Megumi Teshima
Sculpture creation, planning and editing
Chikako Hasegawa
Photography in India



長谷川 千賀子 塩の循環－沈黙した海より

制作年 2022 年

素材 塩、炭、灰、ブリキ、空気、鉄（土台）

サイズ 250×250×300mm（土台φ580mm×70mm）

炭焼きによる塩のオブジェ＋映像（音楽：豊嶋めぐみ）

●Profile | 長谷川 千賀子

○1977 年多摩美術大学彫刻科卒業、'79 年同大学大学院修了 / 東京生まれ ○1983~彫刻個展 18 回 /
○2008~社会芸術の活動を始め炭焼きアートを展開、「野良の藝術」を企画○2007 年第 16 回ランドスケーププランナー（シンポジウムドイツ）○
2019 年 平成記念美術館（世田谷区）にて個展「炭と大地」世田谷区後援○2022 年「野良の藝術」（出版：埼玉新聞社）編集チーム





ホリグチシンゴ

FUZZY CRAWL (2020) 〈左〉

制作年 2020 年

素材 キャンバス、水性アルキド樹脂、顔料

サイズ 1303×1303mm

接着剤をキャンバスの上に塗り、粒子の荒い絵の具をばら撒くことで描きました。

制作した当時は、生命をテーマにして制作した訳ではありませんでしたが、空気の流れや重力といった、自分がコントロール出来ない力によって生み出された絵を見て、風や水に乗って広がっていく生命の広がり に似たものを感じました。

ホリグチシンゴ

DRAWINGS (HORIZON CONVERTER) 〈右〉

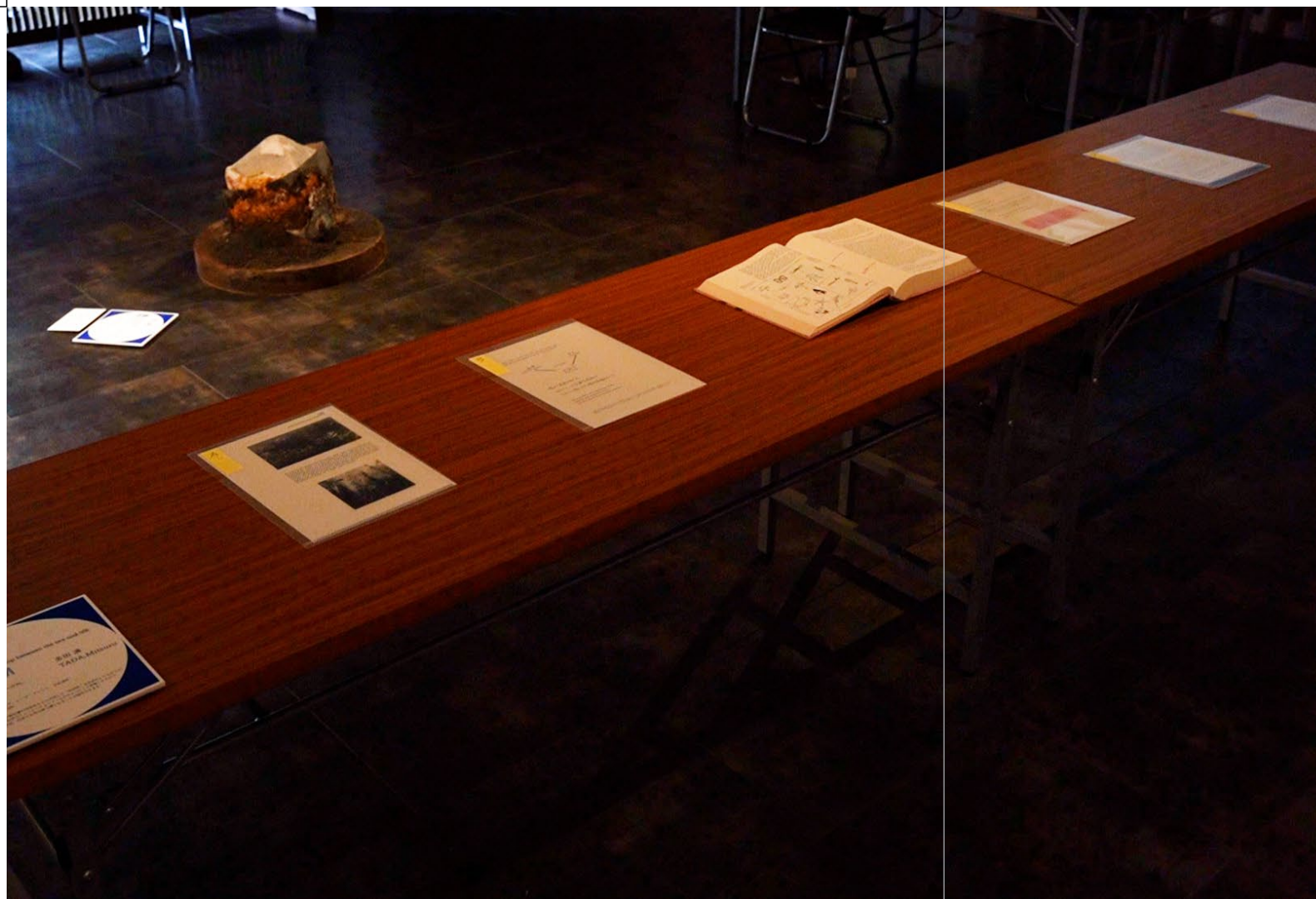
制作年 2022 年

素材 水彩紙、アクリル絵の具

サイズ 297×420mm

今回の MMM で実施している（もしくは実施する予定だった）滞在制作に向けて描いたドローイングです。金網越しに見える水平線の上に絵を描くというコンセプトで企画した滞在制作です。金網とその向こう側の風景を同時に見ることは出来ません。「物を見る」という当たり前の行為について、今一度考えて見ようと思いながら、このドローイングを制作していました。





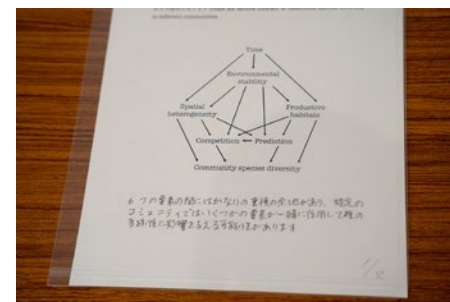
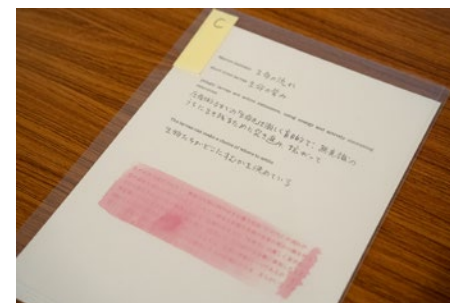
多田 満

3つのエコロジー — 海と生命のかかわり

Three ecology — The relationship between the sea and life

制作年 2022 年 | 素材 紙にインク、レーザープリント、水彩塗料 | サイズ A4、3 枚

エコロジーの教科書の内容をもとに作成した「科学詩」を作品化したものです。科学詩は、科学コミュニケーションツールのひとつとして考案したもので、科学者と市民、科学と文学の架け橋になることが期待されます。



●Profile | 多田 満（環境研究者）

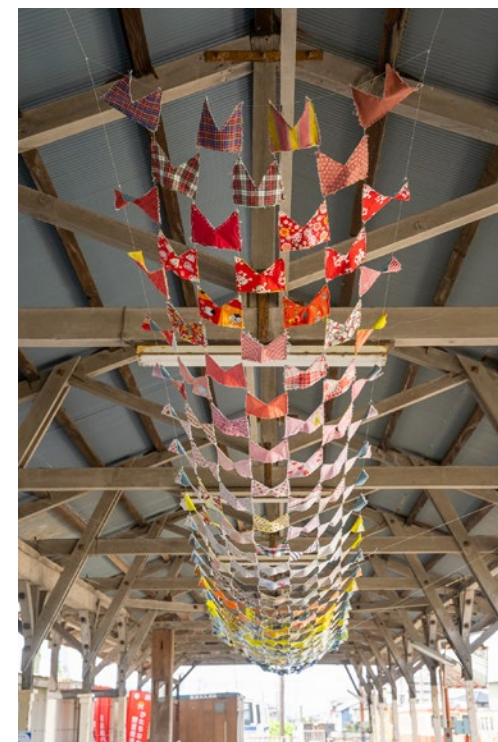
環境科学、文学、芸術、教育の各分野で研究活動をおこなっている。2015 年より新たな対話手法「環境カフェ」を国内外で開催、ならびに科学論文をもとに作成する「論文詩」を考案し、科学コミュニケーションツールとして開発している。科学と芸術のつながりから「生物圏」や「人と植物の連関（植物人）」をテーマに、品川区 O 美術館や茨城県つくば美術館などで個展 10 回、東京、パリ、ニューヨークで開催の展覧会で入賞 6 回。



△ 環境カフェの様子
2022 年 | 実施日 8 月 10・12 日 | 15:00 - 17:00



毎年、那珂湊第一小学校にて旗をつくるワークショップを行っています。
旗は、家庭で余っている布を生徒に持参してもらい、一針一針縫って制作しています。2022年で7回目となり、旗の総数は322枚となりました。



43

BANKOKKI 2016-2022

制作年 2016-2022年
素材 布、ハトメ、結束バンド、ロープ
サイズ 1×15m



木材合板とカラーフェルトを用いて立体的に制作する、ヘッドマークデザインワークショップを行なっています。制作された4つのヘッドマークは、ひたちなか海浜鉄道の協力により、営業列車に取り付けて走行します。



宝塚大学 東京メディア芸術学部渡邊哲意 研究室 湊線ヘッドマーク

制作年 2022年

素材 木材合板、カラーフェルト

サイズ 450 x 450 x 50mm





みなとのおへそ WS ①

奥田 祥吾

プラスチックを海出そう、生命あるモノを生み出そう。

- Before drifting to the SEA.

2022 年 | 実施日 8 月 11 日 15:00 - 16:00、



レイチェル・カーソンさんによるセンス・オブ・ワンダーを学び、地球環境に配慮したアート・デザインを知る。そして、持続可能性（サステイナブル）とは何かを学ぶ。プラスチックの廃材を素材とした創作ワークショップを通じて、地球環境への興味と関心を図ることを目的とする。

●Profile | 奥田 祥吾 建築設計事務所を主宰しながら、環境アート活動を行っている。コロナ禍を契機に、地球環境に配慮したブランドを立ち上げる。現在、青山製図専門学校にてサステイナビリティに配慮した建築環境工学と、建築 CAD 演出の講座を受け持っている。

みなとのおへそ WS ②

今中 厚志 / 中西 礼愛

海の生きものを描く AR ワークショップ

2022 年 | 実施日 8 月 11 日 16:00 - 17:00



本ワークショップは、「みなへそ」内につくった海を背景に、奥田祥吾氏によるワークショップで創作した海の生きものを、AR 空間で動かしてみる！という体験をします。新しい技術とアートの可能性を考える機会になればと考えます。

※AR(Augmented Reality) とは、拡張現実というもの指します。現実の知覚（ここでは視覚）情報に対し、現在位置に応じたモンスターを出現させたり、顔の位置に合わせて動物の耳を付与させたりといった人工的に改変した情報を提供する技術です。

- Profile | 今中 厚志 デザインを学ぶ学校で Web サイトをつくる授業を担当
- Profile | 中西 礼愛 横浜美術大学副手、フリーアニメーターとしても活動中





本展は MMM の創設から 2021 年までの歩みを概括したアーカイブ展になります。クロノロジカルな会場構成を軸に、文字と、模型と、写真と、映像を通して「MMM が地域にあたえた変化」を伝えます。



MMM アーカイブ展

2022 年 | 展示期間 8 月 14 日 - 8 月 28 日

●Profile | 小佐原孝幸 (ディレクター)

デザイナー。2009 年よりアート・デザインを通してひたちなか市の活性化プロジェクトに携わる。2014 年ひたちなか市功労表彰。2015 年《ひたちなか海浜鉄道湊線駅名標》でグッドデザイン賞受賞。2018 年《駅名菓トレンシェ》でいばらきデザインセレクション知事選定受賞。同駅名標は美術教科書 (日本文教出版『中学美術 I』) に掲載され、文字のデザインの模範となっている。



MMM 共同代表より

川野邊 優花

(MMM 実行委員会共同代表)



本年も余日少なくなってまいりました。今年度の MMM 共同代表に就任しました、川野邊優花と申します。現在武蔵野美術大学造形学部デザイン情報学科の第三学年に在籍しており、その傍ら課外活動として一年ほど前から MMM に関わってきました。MMM2022 では、去年とは異なる運営体制で芸術祭が開催されたため、不安もありましたが、無事に会期終了を迎え、こうして新しい年を迎えることができ、大変喜ばしく思います。また開催にあたってご尽力いただいた方々に、この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。今後も那珂湊のますますの発展と、出展してくださったアーティストの方々のご活躍をお祈りして、共同代表挨拶の締め言葉とさせていただきます。

「とても地面に似たところから」

少し遠のいてしまった場所のことを考える。那珂湊という場所でしか語ることのできない声をすくい上げて、「みなとメディアミュージアム」という芸術祭を作り上げていこう、と意気込んでいた 2019 年の冬のことを。その後、新型コロナウイルスによって焼け野原のようになってしまった芸術祭の土壌で、まだ私たちは立ち上がれていない。答えはとてもシンプルだ。直接現地に赴いて、その場で滞在し、芸術とあなたと私の関係をもう一度編み直していくことだ。

そのためには、私という身体を一度まっさらにする必要がある。今までの関係や、しがらみや、固定観念をすっかり忘れ去ってしまっ、那珂湊の潮風と、言葉と、食事と……そこで立ち現れてくる「生きること」を、私の身体にインストールしていくのだ。それは多くの時間を要する。1 日や 2 日ほど那珂湊に旅行しただけでは、このインストールは完了しない。

waxogawa

(MMM 実行委員会共同代表/キュレーター)



waxogawa 略歴

2019 年から MMM スタッフとして参加。2020 年から現共同代表。キュレーション展示に伊藤道史「私であることの試み／CONATUS」(2022、NEORT++)、古川涼子・橋爪志保・太田通月・山田晋己「ヒト以外であったときの記憶」(2023、デカメロン) など。

とはいえ、私の心のなかで、微細な／けれど／大きな、問いが立ち上がっている。オンラインコミュニケーションが隔々まで行き渡ろうとしているなかで、やはり私たちは肉体を移動させて、那珂湊という場所でもしか経験しえないものを掴み取りにいかねばならないのだろうか。コミュニケーションや人間性そのものが書き換えられようとしているなかで、芸術祭は依然として、「現地」にしがみつかなければならないのだろうか。

こうしたことを考えるにつけ、私はアーティストやスタッフに対して、既存身体の忘却とインストールを求めるのは酷ではないかと思ってしまう。個々人の生活を尊重しながら、生活を一から書き換えることなど、できるのだろうか。だからこそ、と思う。だからこそ、新たなアーティスト像を再構築していかなければならないのだ。波打ち際に足を浸しながら、「ここにずっといい」と心の底から思える環境を作り上げて

いくこと。窓を開け放して、カーテンが揺れるのを見ながら、自分自身がここに確かに存在している実感を持つこと。従来の「豊かさ」概念では捉え切れない、人間存在の豊穡さを、再認識する場として芸術祭が機能するように、私たちは試みなければならない。

さて、どこから始めるべきだろうか？ 誰かひとりが全てを背負い込んで、組織を一から書き換えていくことから？ 助成金を獲得するところから？ スタッフを集めるところから？ もっと根本的に——覚悟を共有するところから。あなたが何を考えていて、私は何を大切にしている——、そうしたところから始めなければならない。いま、時は忙しく過ぎ去り、大切にしていたことをすぐに忘れてしまう時代だからこそ……。立ち止まって、私たちが真に心揺さぶられたものが何だったのか、見つめ直したい。その向こうに見えてくる人間性をこそ、芸術というメディアで再建していく必要があるのだ。

ABOUT

アートイベント『みなとメディアミュージアム (MMM)』は、「産」「学」「芸」から成る「みなとメディアミュージアム実行委員会」によって運営されています。その第1回が開催されたのは「ひたちなか海浜鉄道湊線」が廃線危機にあった2009年のこと。以降、芸術表現を通じた地域活性化を目的として、12回のMMMを開催してきました。多くのメディアにも取り上げていただき、2012年には「いばらきイメージアップ大賞」奨励賞を受賞。2014年には「ひたちなか市誕生二十周年記念式典」にて表彰。2015年には「いばらきデザインセレクション」のソーシャルデザイン部門に選定されました。

2009・2010・2011・2012・2013・2014・2015・2016・2017・2018・2019・2020→2021・2022

2009

みなとメディア
ミュージアム
スタート

2012

「いばらき
イメージ
アップ大賞」
奨励賞

2014

「ひたちなか市
誕生二十周年
記念式典」表彰

2015

「いばらきデザイン
セレクション」
ソーシャル
デザイン部門選定

2022

現在

2009



小佐原孝幸「海浜鉄道 駅名標」

2011



井口雄介「CUB-e-SCAPE」

2016



白田那智「Plastic Practice」

2020→2021



・エコツミ・「神話行列～降臨道中～」

ひ
た
ち
な
か
市
の
こ
ど
も
た
ち
に
大
き
な
夢
と
大
き
な
力
を



公益財団法人

KAWASAKI

KIDS 基金

日、出づる道。

ひたちなか
海浜鉄道株式会社







ファンページ

SNS 各種
更新中!!



@keha.601

おらが
湊鐵道
応援団

@keha601



ORAGA MINATO
TETSUDO OENDAN

おらが湊鐵道応援団

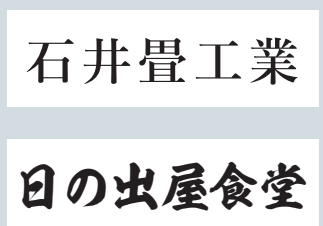
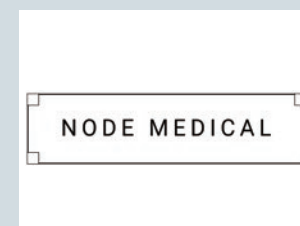
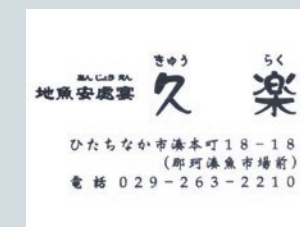
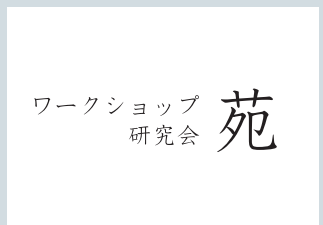


ほんちょうどおりしょうてんがい
本町通り商店街
 Honcho-dori Shopping Street

那珂湊本町通り商店街振興組合



野津田文化の会





2022. 8.7_{sun} - 8.20_{sat} 11:00 - 18:00

茨城県ひたちなか市

百華蔵・那珂湊駅・みなとのおへそ
ひたちなか海浜鉄道湊線車両 など

主催 みなとメディアミュージアム実行委員会

共催 | 宝塚大学 常磐大学 協力 | 一般社団法人新宿メディア芸術地域活性化推進協会

後援 | ひたちなか市 ひたちなか市教育委員会 ひたちなか海浜鉄道株式会社 環境芸術学会
ひたちなか商工会議所 おらが湊鉄道応援団 一般社団法人交通環境ネットワーク

    <https://minato-media-museum.com>

2023年 1月10日 発行

著者 ——— みなとメディアミュージアム実行委員会

編集 ——— みなとメディアミュージアム実行委員会・奥田 祥吾・ヤナチ製作所

デザイン ——— ヤナチ製作所

撮影 ——— おむにぼろ

©2023 by Minato Media Museum. All rights reserved.